



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第 12 期展
「新島襄の Go Global—海を越えて—」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第 12 期展
「新島襄の Go Globalー海を越えてー」

会期：2021 年 3 月 9 日～2021 年 9 月中旬

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：小野功男画「アメリカ上陸」1965 年

ごあいさつ

2015年3月の献堂以来、同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）で1 Semesterごとに行ってきた一連の展示は、一般的な学部学生の在学期間である4年（8 Semester）を1タームとした企画で、2019年度から2ターム目を迎えています。2ターム目の3年目にあたる今回の第12期展示では、1ターム目の第4期のテーマ「新島襄のGo Global—海を越えて—」を踏襲して、建学の精神である「良心教育」を実現するための教育理念の1つである「国際主義」の原点と意義についてあらためて振り返ります。

創立者・新島襄は、明治十年代半ばの演説草稿の中で、「人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人と見なしてこれを愛せば、決して区域の狭き者にあらず」（同志社編 『新島襄教育宗教論集』岩波文庫 2010年 298頁）と述べています。このように世界宗教であるキリスト教に裏打ちされた「愛人主義」、すなわち一国にとどまらず、人種、民族、国家を超えて、同じ人間同士として愛し合い、国家から独立した民間の力で世界に貢献することが、同志社の「国際主義」なのです。

今回の展示は、「海」を、新島が新しい世界に踏み出す際の扉ととらえ、海を越えるたびに新島が何を、どのように、どのような心情で受け止め、どのような考えを抱いてきたのかに焦点を当てています。今の大学生の皆さんとほとんど変わらない、当時21歳の新島が、海を越えて出会った異文化への驚きを綴った「函楯紀行」（レプリカ）や、アメリカでの学びを終えて29歳になってからの欧州視察での気づきを記した「英文日記」（レプリカ）などからは、新島が海を越えて学び続けた先にこんにちの同志社があるということが感じられることでしょう。

新島の“Go Global”が、新型コロナウイルス禍で顕在化した「自国第一主義」を乗り越えて、1人でも多くの学生の“Go Global”へとつながることを期待いたします。

キリスト教文化センター所長

2021年3月

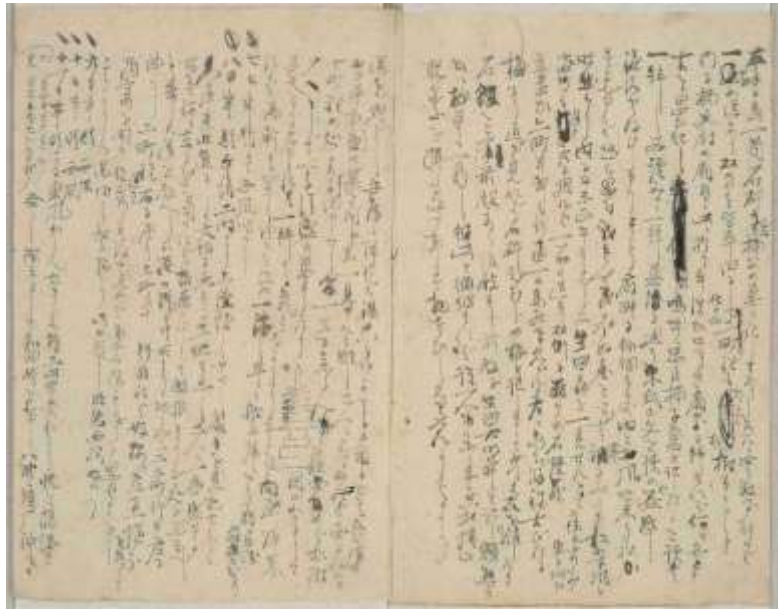
目次

ごあいさつ.....	1
展示テーマ「異文化との対話」.....	3
展示テーマ「まなびの実現」.....	13
資料リスト・使用写真リスト.....	23

展示テーマ

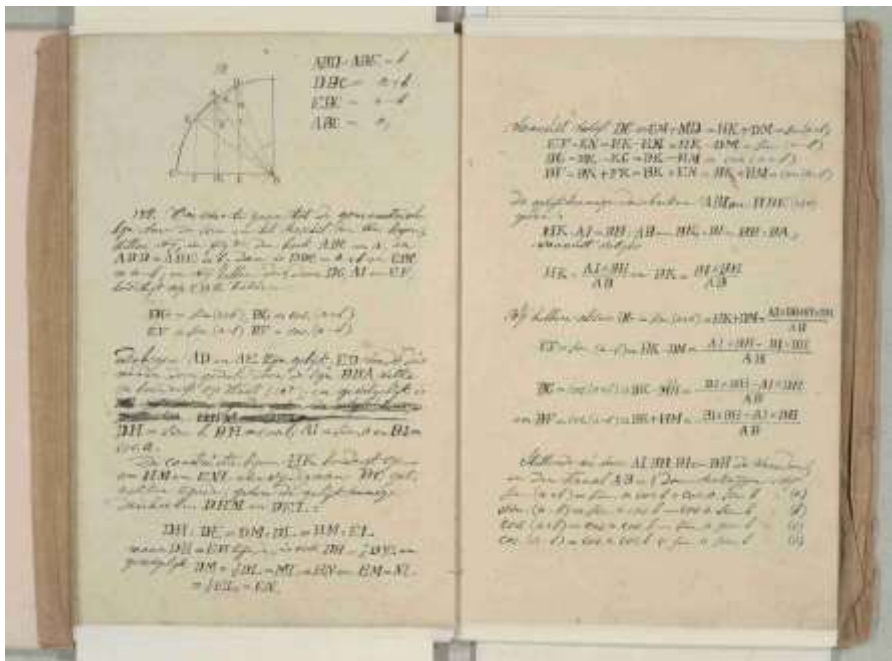
「異文化との対話」

江戸の安中藩邸で誕生して以来、新島襄の生活の中心は江戸でしたが、青年を迎えた新島は、海を越え新しい文化や文物と出会います。ここでは、海を越えて未知との遭遇の中で新島がどのようにその事象を受け取り、感じ、行動したのかを資料を通じて考えます。



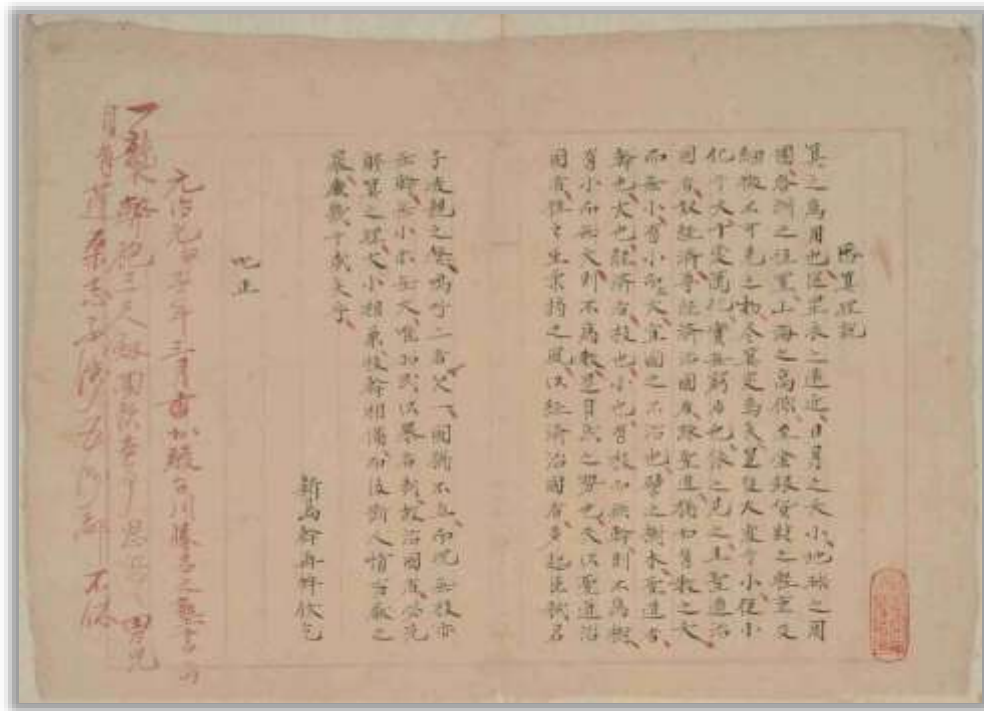
兵庫玉島往復紀行 (複製) 1862年 1冊 27×19cm

新島が1862年(文久2)11月から翌年にかけて、約2カ月間備中松山藩が所有する洋式帆船快風丸に乗船し、江戸と玉島間の往復航海に同船した時の手記です。展示部分は兵庫で下船し、楠木正成と平清盛の墓を訪れた記録で、当時の歴史上の人物に対する新島のイメージが彼の行動から見て取れます。



航海術のノート (複製) 江戸時代後期 1冊 25.5×20cm

新島がオランダ語で書き残した航海術に関するノートです。展示部分は三角法の加法定理に関する部分です。新島は13歳ごろから蘭学を学び始め、その後オランダ語や英語を通じて物理学や数学などを学びます。そして、17歳になると、幕府の軍艦操練所に入り、航海術を学び始めました。当時は鎖国状態でしたが、そのような状況下でも、新島は外国語を通じて外国の文物に触れていました。



感算理説 (複製) 1864年 (元治元) 1枚 26×37cm

新島は再度快風丸に乗り込み、函館へ向かう直前の心情をこの資料の末尾に漢詩で書き残しました。海を越え、新しいものを求めて行動を起こす際の新島の気持ちが表示されています。新島の父・民治が安中藩に届けた文書の写しによれば、新島の函館行きの理由は、同地の武田塾で学び、同時に同塾に関係する外国人からも学ぶことでした。そうした将来を見据えた決意のような感情を表した漢詩です。



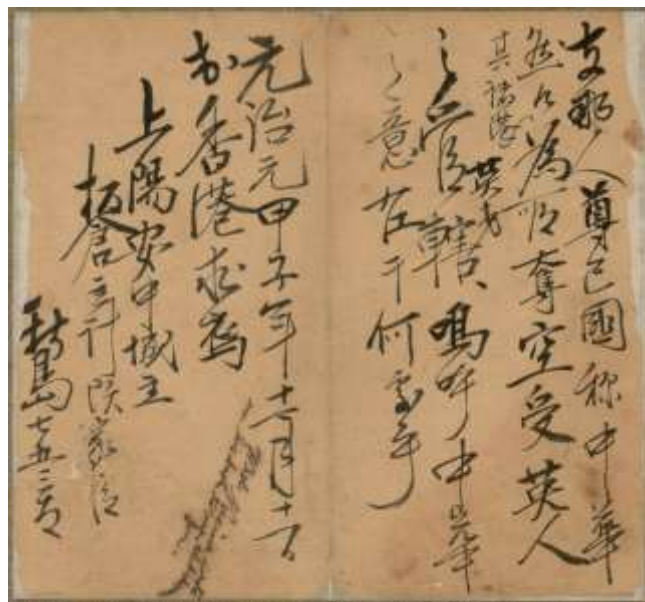
函楯紀行 (複製) 1864年 1冊 16.5×22.5cm

新島は函館に滞在した2カ月弱の間、開港地・函館の現状を日本との対比で見比べてきました。そのときの記録が手記として残されています。ここでは、新島自身も目の治療に訪れたロシアの病院に関する彼の記述を紹介しています。新島が書き残したものは、彼が人づてに聞いた当時のロシア病院の現状と、それを踏まえて新島が抱いた感想です。新島の、異文化と自文化に対する視点が読み取れます。



新島襄肖像画 (複製) 1890年 1点 20×15.6cm

函館から密出国する前日6月13日に撮影した写真を元に、原田直次郎が描いた肖像画。この時に撮影した写真原板(ガラス)は、新島家に送られ、その後同志社が保存するに至ったと考えられます。近年、この写真を撮影した人物が、ロシア帝国初代日本駐在領事ヨシフ・ゴシケヴィチではないかと指摘されました。



漢訳聖書扉の書込み (複製) 1864年 1幅 20.8×22.3cm

新島が購入した漢訳聖書の空いたページに書き込んだとされる漢詩です。この言葉を記す前に、新島は中国の上海と香港を実際に見ています。アヘン戦争後、列強諸国の支配下に置かれた中国の現状を嘆いた漢詩です。

<新島襄の Go Global>



2度の快風丸乗船時の航路 最初の密出国時(点線、1864~65年)と2度目の欧米行き(実線、1884~85年)の航路

新島の生まれは江戸であり、青年時代までは江戸が活動の中心でした。しかし、蘭学を通じて外国の諸科学を学び、アメリカの地理書『連邦志畧』や『ロビンソン・クルーソー』の日本語訳に刺激を受けた新島は、やがて快風丸での初めての航海をきっかけとして活動範囲を広げていきます。その範囲は、密出国以後、日本を越えて、世界へと広がりました。

<江戸での学び>



「万世御江戸絵図」

新島襄は1843年(天保14)江戸城東側にある安中藩邸で生まれました。以来、21歳の時に函館に行くまで、この場所を主に生活の拠点としています。この間、新島は漢学や書、絵、蘭学そして、自然科学も学びました。なかでも、江戸の築地にあった軍艦操練所で、約2年間航海に必要な算術を中心とした自然科学を学びました。

<江戸の外へ>



快風丸模型



ワイルド・ローヴァー号模型

新島を江戸の外の世界へと導いた船が3隻あります。備中松山藩が所持していた快風丸と、アメリカ船籍のベルリン号とワイルド・ローヴァー号です。快風丸は、江戸と玉島（岡山県）の往復航海を通じて新島に江戸の外の世界を知らしめました。再度、乗船することになったときには、新島を開港地の函館に運びます。一方、ベルリン号とワイルド・ローヴァー号は函館から密出国を敢行した新島をアメリカへと導きました。これらの船は、航海術などを通じて自然科学を学ぶだけでなく、新しい文明との出会いをつなぐ役割を担いました。

<函館での学び>



新島襄「函館紀行」(部分)



原田直次郎作「新島襄肖像画」

21歳を迎えた新島は、安中藩から許可を得て函館に向かいます。当初は武田塾で学ぶ予定でした。理由は外国人と接触し、学ぶことができると考えたからです。しかし、塾長である武田斐三郎が不在であったため、最終的にはロシア正教司祭ニコライのもとに身を寄せ、日本語を教えながら学ぶこととなります。この間に診察を受けたロシア病院が強く印象に残ったようです。医療費無料、最新の設備、充実した患者へのケアを知る一方で、その結果、函館の人心がロシア人に向かい、後年の憂いとなるのではと危惧を抱きました。新島が密出国を敢行するのはこの約1カ月後です。

<新島襄がはじめて見たアジア>



新島襄筆「航海日記」1864-65年 サイゴンに関する記録

新島は1864年（元治元）6月14日（旧暦）に函館を密出国し、翌年7月20日（旧暦閏5月28日）にボストンに到着しました。其の間、およそ一年間で見聞きしたものを新島は挿絵入りで日記に書き残しています。特にフランス統治下のサイゴン（現・ベトナムのホーチミン）に関して詳しい記述があります。その内容は、人々の風俗、生活、フランス支配下における現地の人々の抵抗、当時のフランスの軍備など多岐にわたります。

<アメリカ上陸>



小野功男画「アメリカ上陸」1965年

新島が乗船したワイルド・ローヴァー号は、1865年7月20日がアメリカのボストンに入港しましたが、新島には引き取り手が無く、しばらくは船上で生活していました。到着から約3か月後の10月11日、船主ハーディーが新島と会い、密出国の理由を文章化させるために新島を港近くの海員ホームに滞在させ、3日間の猶予を与えます。この時に書いた文章（脱国の理由書）にハーディーは感銘を受け、新島を引き取ることとなります。そして、新島はこの約2週間後にフィリップス・アカデミーに入学し、アメリカでの学びを始めました。

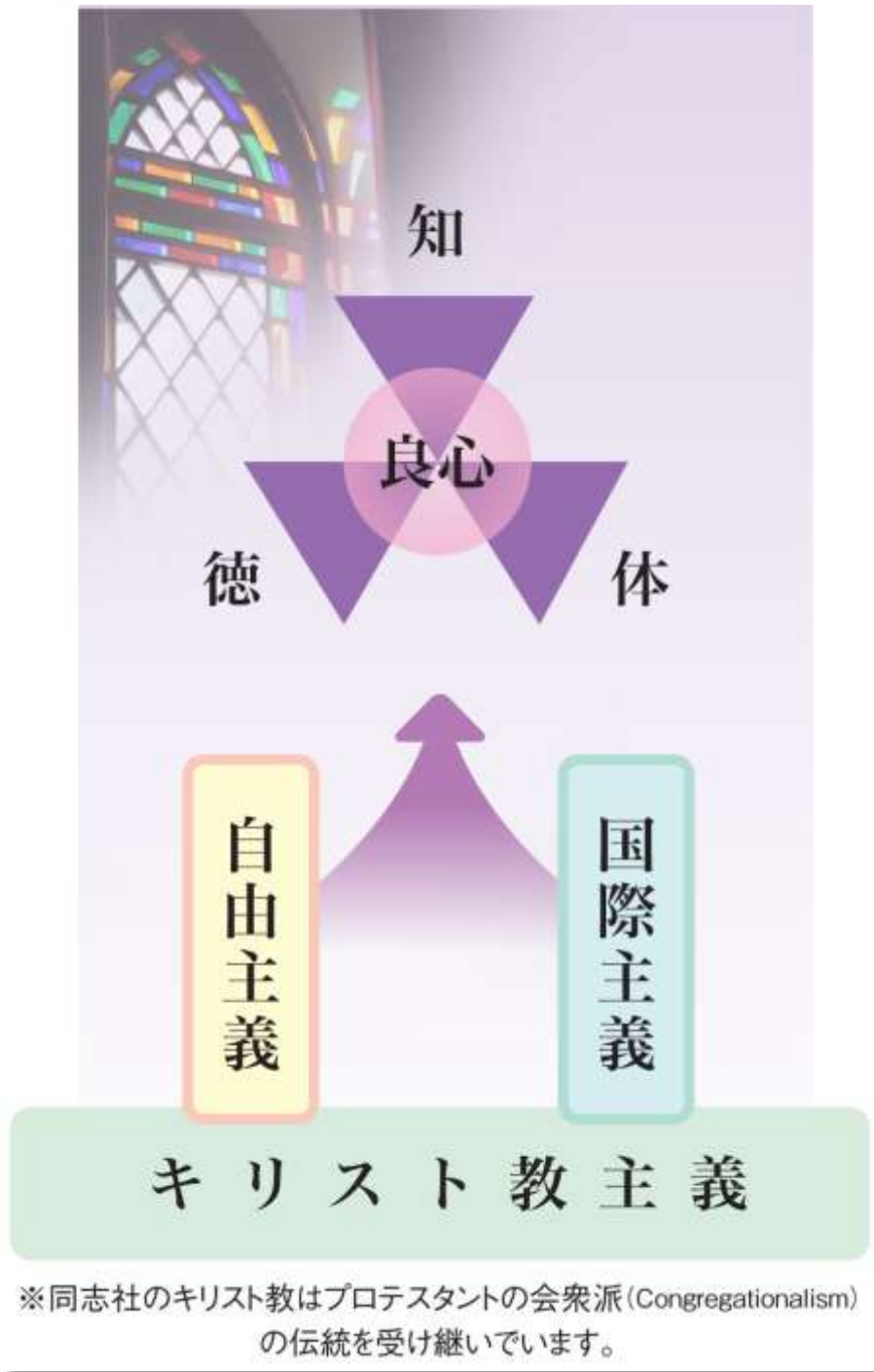
<フィリップス・アカデミー時代の新島襄>



フィリップス・アカデミー フィリップス・アカデミー時代の新島襄

新島がアメリカで最初に進学した学校がフィリップス・アカデミーです。1865年10月31日に入学した新島は、およそ2年間、自然科学を中心に学びました。また在学中に洗礼を受け、正式にクリスチャンとなっています。1867年6月にアカデミーを修了すると、アーモスト大学へ進学しました。

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

ポスターパネル

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

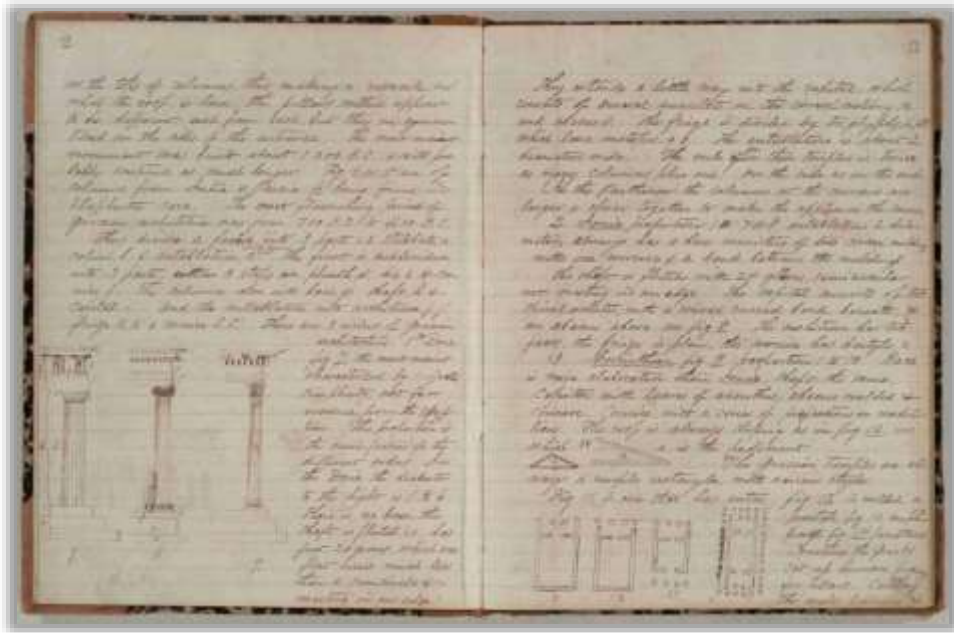
開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週 3 回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の 경우에는、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

	今出川校地	京田辺校地
火曜日	17 : 30~18 : 10	ランチタイム (12 : 35~13 : 00)
水曜日	10 : 45~11 : 30	
金曜日	ランチタイム (12 : 35~13 : 00)	

展示テーマ

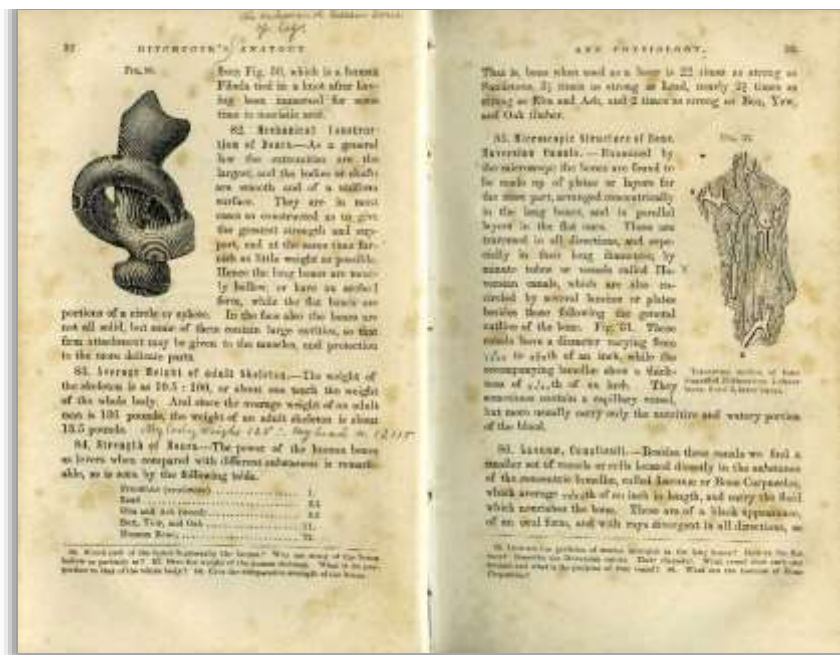
「まなびの実現」

アメリカに到着した新島は、約10年間アメリカの中・高等教育機関で学びました。さらに、この間、ヨーロッパ各地の教育視察を行う機会に恵まれました。アメリカでの学びを通じて教育の重要性を認識し、ヨーロッパでの学びを通じて、文明の外側に見えている知識や技術だけでなく、その内側にあるキリスト教も同時に学ぶ必要があると考えるようになったと、新島は後に述べています。そして、このまなびの実現のために開かれた学校が同志社英学校であり、創設しようとしたのが同志社大学でした。この軌跡を資料から振り返ります。



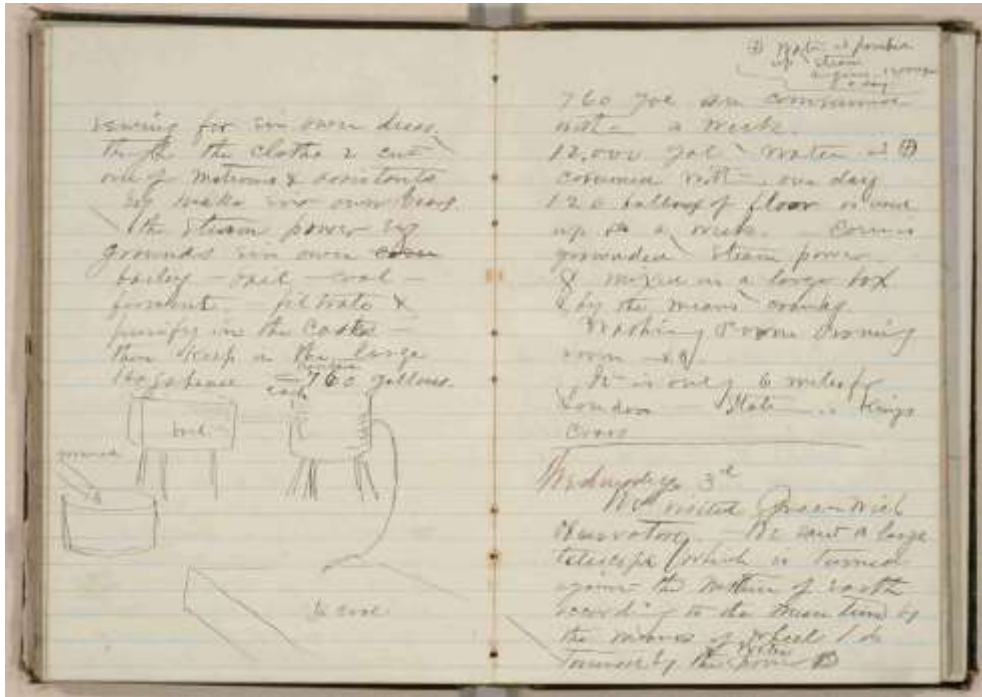
建築史ノート (複製) 1860年代後半 1冊 26.5×20cm

新島がアーモスト大学時代にまとめたと考えられるノートです。ところどころに説明に適した挿絵が挿入されています。新島がアメリカで自然科学を広く学んだことを示す資料のひとつです。



Elementary Anatomy and Physiology (複製) 1860年 1冊 20×12.4cm

新島がアーモスト大学時代に使用していた生理学・解剖学の教科書です。展示しているページは人骨に関する分野です。「83 成人の人骨の平均的な重さ」という項目では、新島が自身の体重125ポンド(約56.7kg)から骨量13.125ポンド(5.95kg)を導き出した書き込みがあります。



英文日記 (複製) 1872年 1冊 19.8×13cm

1872年新島襄が、在米中、岩倉使節団随行員としてヨーロッパ諸国を初めて歴訪した時の3か月半にわたる記録です。訪問国はイギリス、フランス、スイス、ドイツ、ロシア、オランダ、デンマークで、主な目的は教育関係施設の視察でした。日記を詳しく見ると、教育施設以外にも歴史的文化的遺産、博物館・美術館などを訪問しています。今は博物館となっているグリニッジ天文台を訪問したのもこの時でした。



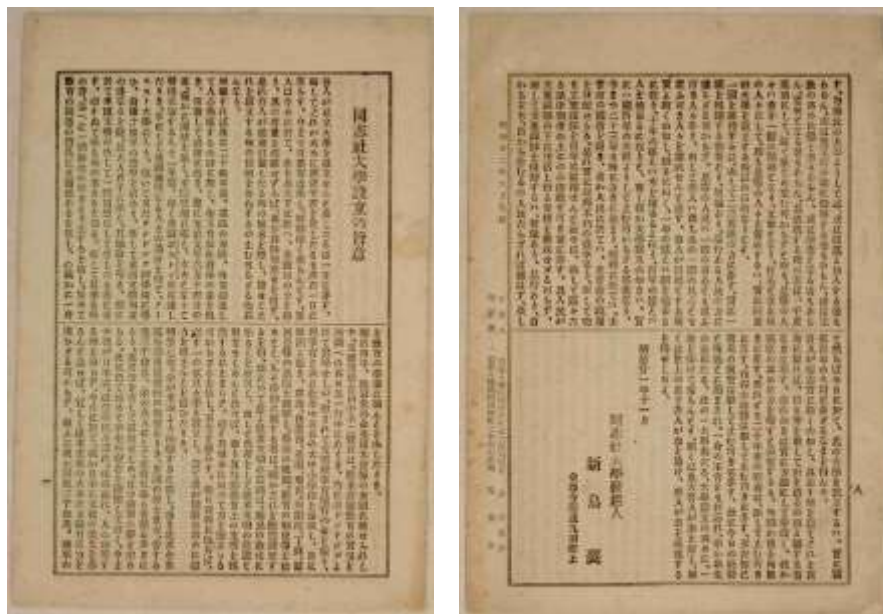
新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていたJ.M.シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854～不詳) より贈られた英訳聖書。これより前に新島は漢訳聖書を手に入っていますが、それは一部でした。英文聖書を手にしたことで、初めて全文を目にすることになりました。この聖書の中にある、手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。



自責の杖 (複製) 年不詳 3点 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年(明治13)4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰にかかる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれてきました。



同志社大学設立の旨意 (複製) 1888年 1冊 21.5×14.8cm

1888年(明治21)11月から配布されたパンフレット。新島襄が骨子をつくり、徳富蘇峰が文章化しました。この内容は、全国の新新聞や雑誌に掲載され、国内で広く広報されました。この中で新島が訴えた大学設立の目的は、「一国の良心」を育てることでした。その背景には、新島が欧米で実地体験したことがあります。

ポスターパネル

<アーモスト大学時代の新島襄>



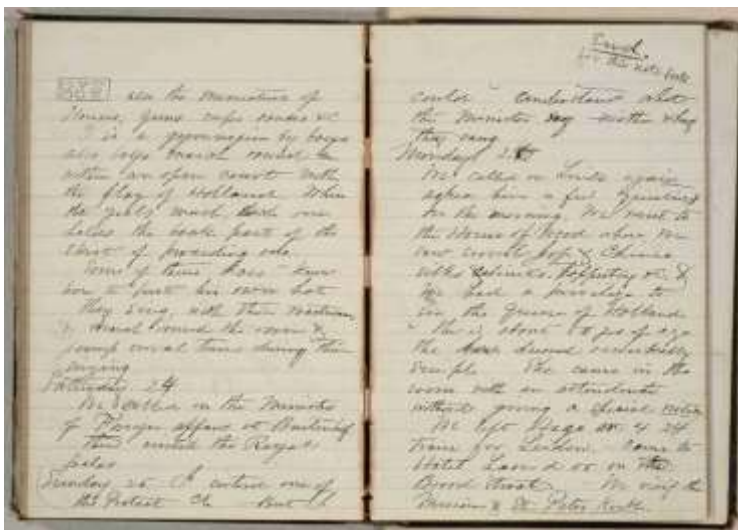
新島襄が寮生活を送った North College (中央) とジョンソン・チャペル (奥)



ジョンソン・チャペル内部

1867年6月にフィリップス・アカデミーを修了した新島は、約3カ月後アーモスト大学に進学します。そして、3年間、自然科学を中心に学び、当時のアメリカの上流階級の子弟と一緒に教育を受けました。そして、修了時には理学士 (Bachelor of Science) の学位を授けられました。1870年7月に大学を修了した新島は、神学の専門学校であるアンドーヴァー神学校に進学しました。

<1回目のヨーロッパ訪問>



英文日記 (1872年) オランダ王妃に偶然遭遇した記録 アンドーヴァー神学校時代の新島襄



新島の1回目の訪欧は、岩倉使節団の文部理事官・田中不二麿の視察に通訳として同行した時でした。訪問先は、イギリス、フランス、スイス、ドイツ、ロシア、オランダ、デンマークです。視察の対象は各国主要都市の教育施設やその教育の実施状況ですが、イギリスではグリニッジ天文台を見学し、オランダではオランダ王妃に遭遇するなど、各国の学問や文化を象徴する施設も訪問しています。のちに新島はこの時諸国を見聞した経験が、外国の文明の外側だけを学ぶのではなく、その内実も合わせて取り入れるべきという考えを呼び起こさせ、知徳併行を実施する学校設立を考えるようになったと述べています。

<ラットランド演説>



油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第65回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5,000ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<幕末の今出川周辺>

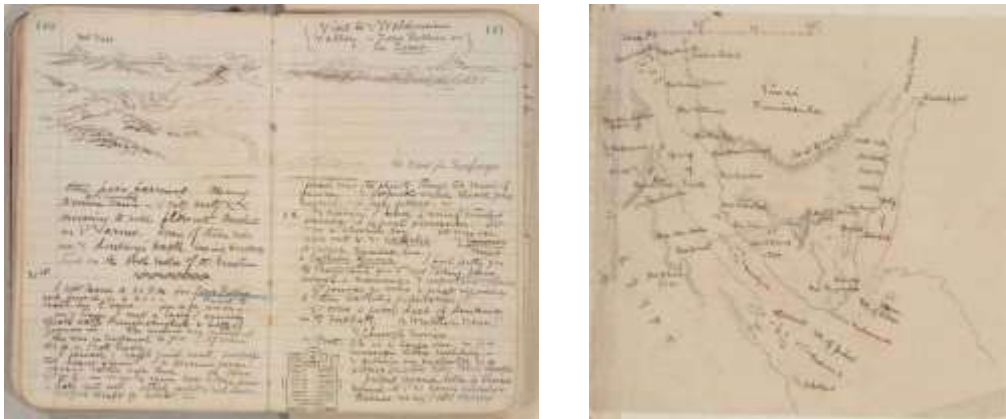


「文久改正新增細見京絵図大全」部分 1863年 国立国会図書館デジタルコレクションより借用

現在の今出川キャンパスは、幕末には薩摩藩邸や公家屋敷が並ぶ場所でした。そして、その北には京都五山第2位の相国寺が、南には禁裏御所と公家屋敷が並ぶ、日本の伝統文化を象徴する空間（現在の京都御苑）でもあります。同志社はこのような特異な場所に1876年（明治9）キャンパスを構えることになりました。

同志社が開校する6年前、江戸から明治へ年号が変わる時に京都の町に大きな変化が起こります。象徴的な変化は1869年（明治2）東京奠都（明治天皇の東京行幸）です。これにより禁裏御所とその周辺の公家屋敷の多くは空き家となり、かつての優雅さを失っていきます。また、京都の寺院も明治新政府の土地と人民整理政策の影響を受け、弱体化していきます。そのような周囲の状況下でキリスト教主義学校として同志社はこの地に移りました。

<2 回目の欧米訪問>



英文日記（1884年）イタリアのトレ・ペリチェ滞在時の記録（左）と、シナイ半島のスケッチ（右）

日本に帰国してからちょうど10年となる1884年（明治17）、新島は再び欧米を訪問します。その目的は大学設立への理解と寄付金の獲得、そして、療養でした。4月に神戸を出発した新島は5月にイタリアに到着し、ローマ、ヴァチカン、フィレンツェ、ジェノバ、トリノと経由して、療養の地であるトレ・ペリチェに向かいます。ここで5週間ほど療養した後、ミラノを経由し、死を覚悟したサンゴタール峠を越えてスイスに入ります。スイスではルツェルン、チューリッヒ、バーゼルを訪れました。その後、アメリカではボストンを中心に積極的に活動していたようで、魚釣りなどに興じる一方、留学中の同志社出身者や旧知の友人・知人と旧交を暖め、また著名な大学の総長・教授と交流しました。1885年（明治18）12月に帰国するまで1年8カ月の旅程でした。

<同志社大学設立運動>



左、「同志社大学設立之主意之骨案」冒頭部分（1882年） 右、大口寄付者の一覧（1888年）「同志社大学設立の旨意」所収

大学設立運動の端緒は、新島が1882年（明治15）に奈良県の土倉庄三郎から法学部設置を条件に5000円の寄付の約束を得たときと言われます。その6年後、新島らは1888年（明治21）11月から全国の新新聞雑誌に「同志社大学設立の旨意」を発表します。この発表は、1889年（明治22）の大日本帝国憲法公布、1890年（明治23）の国会開設を直前に迎えた時期でした。「旨意」ではこうした社会状況を前提として、大学教育で目指す人物像を「良心を手腕に運用するの人物」、「自治自立の人民」、「一国の精神となり、元気となり、柱石となる所の人々」、そして「一国の良心」と表現しています。これを可能ならしめるのは、これまでに同志社の各学校で実施され、世間の信頼を得てきた「徳育知育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざる事」としています。

<Doshisha Spirit Week (キリスト教文化センター主催) >



同志社大學應援団による演舞



講演会



キャンパスめぐり隊

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった建学の精神と伝統があります。Doshisha Spirit Week は、キリスト教主義教育や創立者新島襄に触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的として2003年から始まり、毎年春学期（5月末～6月初旬ごろ）と秋学期（10月末～11月初旬ごろ）に1週間開催されています。期間中には、学内外からのゲストスピーカーによる講演会、建学の精神や同志社の歴史に関する資料展示、キャンパス内を中心に見学する「キャンパスめぐり隊」や同志社大學應援団による演舞などさまざまな企画を行っています。

ポスターパネル

<キリスト教文化センター学生スタッフの活動>



クリスマス・リース作り講習会



チャペル・アワー司会

キリスト教文化センターの多岐にわたる事業を教職員とともに支える存在として、学生スタッフが活動しています。かつては、チャペル・アワーの司会やクリスマス燭火讃美礼拝での聖劇出演などが活動の中心でしたが、これらに加えて、在学生を対象とした「クリスマス・リース作り講習会」の開催、教会の礼拝への参加、SNSを利用した情報発信、フリーペーパー「YES!!!」の発行など、近年そのフィールドは広がっています。学生スタッフの募集は1年を通じて行っていますので、関心のある方はキリスト教文化センター事務室までお尋ねください。

ポスターパネル

<オープン・プログラム (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 手話入門クラス



今出川校地 パイプオルガン講座受講生発表会

1958 (昭和 33) 年 4 月にキリスト教文化センターの前身である宗教部が主催した 4 つの研究会を基にして、「公開講座」がスタートしました。1981 (昭和 56) 年の国際障害者年を機に「手話」と「点訳」の講座を開設。2010 (平成 22) 年度からは名称を「オープン・プログラム」へと変更し、その後も公開講演会の開催や多様な講座の新規開講などにより、一層の発展を遂げています。これまでの受講生は 9,000 人を超え、学生のみならず市民の皆さんも多数参加されています。開講している講座は、キリスト教文化センターのホームページをご覧ください。
<http://www.christian-center.jp/>

資料リスト (展示品は全て複製)

資料名	作者・著編者	年代	法量(cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「異文化との対話」					
兵庫玉島往復紀行	新島襄	1862年	27×19	1冊	同志社社史資料センター
航海術のノート(Stüürmankunst)	新島襄	江戸時代後期	25.5×20	1冊	同志社社史資料センター
感算理説	新島襄	1864年	26×37	1枚	同志社社史資料センター
函楯紀行	新島襄	1864年	16.5×22.5	1冊	同志社社史資料センター
新島襄肖像画	原田直次郎	1890年	20×15.6	1点	同志社社史資料センター
漢訳聖書扉の書込み	新島襄	1864年	20.8×22.3	1幅	同志社社史資料センター
展示テーマ「まなびの実現」					
建築史ノート	新島襄	1860年代後半	26.5×20	1冊	同志社社史資料センター
Elementary Anatomy and Physiology	Edward Hitchcock, Jr	1860	20×12.4	1冊	同志社社史資料センター
英文日記	新島襄	1872	19.8×13	1冊	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	-	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
自責の杖	-	年不詳	最大60	3点	同志社社史資料センター
同志社大学設立の旨意	新島襄・徳富蘇峰	1888	21.5×14.8	1冊	同志社社史資料センター

使用写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「異文化との対話」			
新島襄のGo Global	2度の快風丸乗船時の航路	1993年	同志社社史資料センター
	最初の密出国時と2度目の欧米行き航路	1993年	同志社社史資料センター
江戸での学び	「万世御江戸絵図」	1854年	同志社社史資料センター
江戸の外へ	快風丸模型	現代	同志社社史資料センター
	ワイルド・ローヴァー号模型	現代	同志社社史資料センター
函館での学び	「函楯紀行」	1864年ごろ	同志社社史資料センター
	新島襄肖像画	1890年	同志社社史資料センター
新島襄がはじめて見たアジア	新島襄筆「航海日記」	1864-65年	同志社社史資料センター
アメリカ上陸	小野功男画『アメリカ上陸』	1965年	同志社社史資料センター
フィリップス・アカデミー時代の新島襄	フィリップス・アカデミー	現代	同志社社史資料センター
	フィリップス・アカデミー時代の新島襄	1866年	同志社社史資料センター
同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義	キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図(キリスト教文化センター発行『基督教主義を以って徳育の基本と為せり-同志社大学とキリスト教主義-』所収)	2017年	キリスト教文化センター
チャペル・アワー	京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂	2018年	キリスト教文化センター
展示テーマ「まなびの実現」			
アーモスト大学時代の新島襄	新島襄が寮生活を送ったNorth Collegeとジョンソン・チャペル	現代	同志社社史資料センター
	ジョンソンチャペル内部	現代	同志社社史資料センター
1回目のヨーロッパ訪問	英文日記	1872年	同志社社史資料センター
	アンドーヴァー神学校時代の新島襄	1870年代前半	同志社社史資料センター
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」	1960年代か	同志社社史資料センター
	グレイス教会	現代	同志社社史資料センター
幕末の今出川周辺	「文久改正新増細見京絵図大全」	1863年	国立国会図書館デジタルコレクション
2回目の欧米訪問	英文日記	1884年	同志社社史資料センター
	英文日記所収シナイ半島スケッチ	1884年	同志社社史資料センター
	「同志社大学設立之主意之骨案」	1882年	同志社社史資料センター
同志社大学設立運動	大口寄付者の一覧(「同志社大学設立の旨意」所収)	1888年	同志社社史資料センター
	同志社大学応援団による演舞	2016年	キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Week	講演会	2016年	キリスト教文化センター
	キャンパスめぐり隊	2016年	キリスト教文化センター
キリスト教文化センター学生スタッフの活動	クリスマス・リース作り講習会	現代	キリスト教文化センター
	チャペル・アワー司会	現代	キリスト教文化センター
オープン・プログラム	京田辺校地 手話入門クラス	2016年	キリスト教文化センター
	今出川校地 バイブオルガン講座受講生発表会	2017年	キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第 12 期展

「新島襄の Go Global—海を越えて—」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2021 年 3 月 9 日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture